

---

# 約束～天使より墮天使～

嵯峨野斎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束～天使より墮天使～

### 【NNコード】

N7676Y

### 【作者名】

嵯峨野斎

### 【あらすじ】

近藤優雄、十七歳。主人公である彼は小さい頃からいじめを受けてきた。高校生になってからも續くいじめに無気力な生活を送っていたが、ある日転校生に会った事でその生活は終わりを告げる。

注：前半はいじめについての表現があります。不愉快になられましたら申し訳ありませんへ（――）べコリ 「読みたくないわあ！」 という方がおられましたら、お戻りくださいませ。

# 1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。（前書き）

以前『夢よ現実に』を書いていたときにチラッと載せようか迷っていた小説です。かなり前に書いた小説ですが、一応完結しているので、載せます。つてか『夢よ現実に』の番外編を書く、とか言いながら何してんねん！と自分で思いますが、全然はかどらないんだもん！！（泣）

話の内容は頭の中にあるのに、なかなか形にできない・・・。やっぱ仕事が忙しいからか・・・（言い訳ですね、ハイ）とにかく毎日更新を目指して頑張りつと思いません（はよ番外編書けや自分）

# 1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。

『約束しよう。生まれ変わつたら、君と共に生きていく事を』  
そう言つて、田の前にいる誰かに手を伸ばす。その手には剣が握  
られていた。

『それまで君を一人にする事を許してくれ・・・』

頬に熱いものが流れ落ちた。ああ、自分は泣いていたのだと気付  
いた瞬間、向こうから笑つたような気配を感じて・・・

ペペペペペペペペペペペペ

眼が覚めたら、そこはベッドの上だつた。けたたましく鳴り続け  
る田覚まし時計をバンッと叩き、隣に置いてあつた眼鏡を持ち上げ  
る。

「夢か・・・」

ボソリと呟いた声は少し湿つていてるような気がした。

ふと頬が冷たく感じて、手をやると涙が流れていった。夢の影響だ  
らう。

「変な夢だつたな・・・」

寝癖も相まってボサボサの髪をかき上げながら、彼、近藤優雄は  
起き上がつた。

優雄は十七歳、高校二年生だ。父子家庭で、母親は早くに亡くし  
ている。父は仕事で海外に単身赴任中なので、今はほぼ一人暮らし。  
昔から家事は優雄の担当だったので、苦ではない。

ただ一つ、優雄が苦にしている事は・・・

「学校か・・・」

溜息と共に吐き出されたのはじんよりと暗い声。

のののと身支度を整えながら、食欲もないのに牛乳を胃に流し込む。

「休んじゃ おうかな・・・」

朝が来るたびにそう思つものの、眞面目な性格がそれを許さない。やはり今日も、憂鬱な気分で家を出た。

重い足取りで着いた学校。

友達同士で仲良くお喋りしながら歩いていく生徒達が多い中、優雄は鞄を胸に抱いて目立たないように下駄箱へ向かっていた。俯き気味に歩いているせいで少し猫背になっている。

上靴に履き替えようと腰を屈めた時、突然ドンッと背中を押された。

「あ、いたの」

見上げると同じクラスの女子がクスクスと笑いながら通つていくところだった。

「・・・・・」

優雄は何も言わずに靴を履き替える。

こんな事は日常茶飯事だ。もつ慣れている。

そう自分に言い聞かせ、教室に向かう。今日は上靴が無事下駄箱の中に入っていた。だから今日はまだ幸せな日かもしない。

ざわつく教室に辿り着くと、自分の席まで脇目も振らず急ぐ。周りはみんな自分達のお喋りに夢中だ。そう思っていたが、突然足下に何かが飛び出して躓いてしまった。転んだ拍子に眼鏡がどこかに飛ぶ。

「何やつてんだよ〜」

無様に転んだ優雄を、大笑いするクラスメイト達。特に足払いをかけた男子はニヤニヤと意地悪く笑っていた。

優雄は無言で眼鏡を探し、かける。

反抗すれば余計楽しませると分かっているので、何もなかつたように鞄を持ち直して席に座つた。クラスメイト達はそんな自分に興味を失つたのか、またお喋りに興じる。

ここでの優雄はいつも一人だ。誰も話しかけて来ないし、こっちから話しかけようともしない。唯一話しかけてくるのは昼休みの始まりの時だけ。要は程のいいパシリで、昼食を買いに行かされるのだ。最近は昼休みになると同時に屋上に逃げ込むので、お金を払わされずに済んでいる（その後の文句はいつものことだ）。

俗に言つ、いじめだ。

小さい頃からずつと苛められてきた。今はほとんど無視される状態だが、小学校や中学校の頃はもつと酷かつた。仲間はずれは当たり前で、学校の行事でも組まされる相手が嫌がつて、終いには先生まで諦めて放置した。優雄の持ち物は壊され捨てられるか、手元に戻つても落書きだらけ。一部の男子からは持て余した力の捌け口にされていた。一時期登校拒否を起こしかけた事もあつたが、仕事で忙しい父に心配をかけたくないで相談も出来なかつた。

これまで優雄を育てるために頑張ってきた父。母親がいない事で寂しい思いをしないようにと頑張つていた姿を見てきた優雄は、どうしても話を切り出せなかつた。いじめの原因の一つが、母親がいない事だつたために。

だから優雄はずつと無関心な態度をとり続けた。いつも俯きがちになり、視力が悪いためにかけている眼鏡も相まってクラスメイト達はみんな優雄の顔すら覚えていないだろう。

そんな毎日が続いていく。そう思つていた。・・・今日までは・・

・。

チャイムが鳴り、みんなが席に着いて先生がやつてくる。その後出欠の確認を終えて出て行くのが日常だつたが、今日はいつもと違つた。

「転校生を紹介する。華岡<sup>はなおか かおる</sup>薰君だ」

そう言つて黒板に書かれた名前に、派手な名前だな、と優雄は思つた。ドアを開けて静かに入つてくる女の子の姿も、地味とは言い難かつた。

外国の血が入つているのか、金髪碧眼、彫の深い顔立ちだ。だが不思議と、どこの国の血か分からぬ雰囲気が彼女にはあつた。誰もが羨みそうなプロポーションのとれた身体は、そこにいるだけで場が華やぐ。輝くように手入れされた髪は腰まで長く、手で梳きたい衝動を覚えるほど柔らかに波つっていた。

「・・・？」

優雄は首を傾げた。

今まで彼女に会つた事はない。こんな美人なら、一目見ただけで記憶に残りそうなものだ。だが昔、どこかで会つたような気がする。・・・既視感というやつだろうか。

男子の熱い視線と女子の冷たい視線が集まる中、彼女の方はまるで誰かを探すかのようにキヨロキヨロと教室内を見回している。やがてその視線が優雄の上に来ると、花がぱあっと咲いたかのようにな笑つた。

「ユウ様！」

教師が彼女について説明しているにもかかわらず、薰は優雄のもとまで一気に走り抜け、抱き付いた。

「うわっ！？」

思わず仰け反つてしまつた優雄は、そのまま椅子と彼女ごと後ろに倒れてしまう。

「いてて・・・」

頭を押さえながら起き上ると、彼女は妙にキラキラした笑顔で手まで掴んできた。

「ユウ様！ ずっと・・・ずっと、もう一度お会いしたいと思つて  
おりました」

「・・・は？」

つい間抜けな声が出てしまった。

ぐどいようだが、優雄は彼女に会つた記憶はない。だが眼に涙まで浮かべられてはそんな事を言つ氣にはなれない。

ハツと気がつくと、教師やクラスメイトの視線が全て集中していた。

美女と手を繋いでいるという幸福よりも、みんなから少々というにはきつい睨みを向けられている事が先行きの不安を上回らせてしまった。

昼休み。

速攻で屋上に逃げた優雄は、何故か薫と弁当をつついでいた。

「美味しいですか？ ユウ様のために腕によりをかけて作りました」  
そう言って差し出された弁当をパクつく。

最初、貰ういわれないので断るうとしたが、彼女が悲しそうな顔をするので仕方なく食べているのだ。

「・・・あのさ、何で俺にまとわりつくの？ 俺、君と会つた覚え、  
ないし・・・」

なにせ短い休み時間の度に優雄に声をかけてはひつひつてくるのだ。男子が声をかけてもつれなく返事をするだけで、おかげで優雄は今まで以上にクラスメイト達に睨まれるようになってしまった。

「この分では無視されるどころか、もつと酷いいじめに・・・

「会つてますよ」

暗い思考に陥りそうになつていた優雄は、彼女のあつさりとした言葉にハツとした。

「ユウ様は私を助けてくださいました。命の恩人なんです。だから  
こつしてまた会う事が出来て、とても嬉しいんです」

「・・・・・・」

本当に心から嬉しそうに言われて、反論できない。  
「私はユウ様のお傍にいられればそれだけで幸せです」

人違いじゃなかろうか。

そう思つた優雄だったが、彼女は確信を持つて言つてゐるらしく  
満面の笑顔だ。

「・・・さつきから気になつてたんだけど、その『ユウ様』つての  
やめてくれないかな。俺の名前は優雄だよ。近藤優雄」  
他の人からは名前の漢字の読み方を間違われる事が多く、『まさ  
かず』と読める人はあまりいない。優秀の優なのだから、『ゆう某』  
だろうと思つてそう呼んでいるのだろうか。

「優雄様ですね。ではこれからはそうお呼びします」

・・・あつさり返された。

やはり人違いだろ？。こつちから言つても信じないようだし、彼  
女が人違いに気付くまで付き合つてみようか。

そう思つた優雄だったが、彼女の次の発言にはさすがに引きそつ  
になつてしまつた。

「魔法で身体を大きくした甲斐がありました」

「・・・は？」

本日二度目の間抜けな声。

だが彼女は気にせず続ける。

「優雄様はお忘れでしょ？が、私の本来の姿は花の妖精です」

「・・・へ？」

「あ、他には誰も見ていない事ですし、お見せしましょ？」

そう言つて、啞然としている優雄をおいていそそと立ち上がる。

「解除」

一言そう呟いたかと思つと、薫の身体が光りはじめた。正視出来ないほどの光を放つ薫に、優雄は手で眼をかばつ。

「優雄様！」

しばらくして聞こえた、先程より幾分高くなつた氣がする声に、ゆつくり手をどけると・・・

そこには手のひらに収まるほど小さい薫がいた。背中には虹のように綺麗な色合いの羽が生えている。

「本名はローズと申します」

まさに花の妖精と呼べる姿の薫が、ニッコリと笑いかけてくる。だが優雄は返事をするどころではない。

別にファンタジー好きでもなければ空想家でもない優雄は、目の前の事実についていけなくなつた。つまり・・・現実逃避をした。

「優雄様！？ 優雄様！！」

悲鳴のような薫の声を聞きつつ、優雄は失神した。

## 2 僕の前世はただの人間ではなかつたらしいです。・・・信じられるか。

「何だつたんだ・・・」

家に帰つてきた優雄は、晩御飯を作りながら一人ブツブツと呟いていた。

昼休み、眼が覚めた時は薫はちゃんと人間の姿に戻つていて、心配そうに声をかけてくる彼女からつい逃げてしまつた。頭の片隅で悪い事をしたか、と思わないでもないが、あの状況では誰だつて逃げたくもなるだろう。

その後、いつもより陰湿になつたいじめにあつたが（薫につれなぐされたハつ当たりだらう、主に男子）、薫の事で頭がいっぱいです普段以上に無関心になつていたかも知れない。

「・・・夢だつた。うん、そう考えればいい」

一応の結論を出して心の平穀を取り戻したところで、出来たご飯をリビングに持つていく。席についてさあ食べよつ、といつところで、ピンポンとインター ホンが鳴つた。

「こんな時間に・・・？」

時計は七時を指している。こんな時間に訪ねてくる密に心当たりなどない。

首を傾げつつ、インター ホンの受話器を耳に当へると、聞こえてきたのは・・・

『こんばんは！ 優雄様！』

先程まで心を乱してくれていた張本人の声だつた・・・。

「・・・何でうちに・・・」

『優雄様と一緒にいたいからです』

こんな美女に言われれば誰だつて断れないだらうとは思つ。が、昼休みのあれが記憶にあるうちは素直に頷く事も出来まい。

「悪いけど、俺忙しいんで……」

『『だつたらお手伝いします！ 家事は得意ですからー』』

「いや、別にいいから……」

『それに大事な話もあります』

「…………」

大事な話とやらが何かは見当もつかないが、ここまで必死だとこ  
つちが悪いような気がしてくる。嫌な予感を覚えつつも、仕方なく  
優雄は玄関の鍵を開けに向かつた。

「で、話つて？」

晩御飯を食べるところだつた優雄は、薫が持つてきた弁当も併せ  
て二人でご飯を食べていた（薫は優雄と一緒に食べるつもりだつた  
らしい）。

「勿論昼休みの続きです」

続きがあつたのか……。てっきり人違いだつたと理解して諦め  
たと思っていたのに。

「本当に人違いじゃないのか？ 僕は君の事全然知らないんだぞ？」  
思わず箸を止めて訊いた。昼にも同じ質問をしたが、「会つてい  
る」と言われても全く覚えがない。

「無理もありません。私達が会つたのはおよそ百年ほど前ですから」

・・・薫が言つ事は大抵ぶつ飛んでいる。

そう脳裏に刻んだ優雄は食べる手を再び動かしながら黙つて聞い  
ていた。

薫は食べ終わつて箸を置きながら続ける。

「百年前、優雄様はこことは違う世界におられました。そこは天界、

地界、人間界と三つの世界が隣り合わせている世界です。天界には天使が、地界には墮天使が、人間界には人間が暮らしているんですね。遅れて食べ終わった優雄も箸を置いて、彼女の話を真剣に聞くべきか、と悩みながらもなんとはなしに聞く。

「天使は天界と人間界を行き来でき、墮天使は地界と人間界を行き来できました。人間は他の世界には行く事が出来ません。ここまではよろしいですか？」

「・・・ああ」

もうこうなつたら自棄だ、最後まで聞いてやろう、と腹を据えた。「そこでのあなたはユリウスという、天使と人間との間に生まれた存在でした」

だから『ユウ様』と呼んでいたのか。

優雄は心の中で思う。

「ユリウス様は天界からの仕事で、人間界で墮天使の監視をしておられました。彼らが悪事を働くないように。彼は誰にでも優しくて、気さくな人柄で、人間達から随分慕われておりました。私はユリウス様に助けていただいてからはずつと行動を共にしておりましたので、ユリウス様がどんなに素晴らしい方なのか、よく知つております」

「・・・・・」

薰の言うユリウスとやらが、自分と同じ人間（天使というべきか？）だとは思えなかつた。それだけたくさんの人間に慕われる素晴らしい人間だつたなら、今の自分とは雲泥の差だ。

「ユリウス様は剣の達人であり、魔法の使い手でもありました。天界でも人間界でも、彼ほど優秀な使い手はほとんどいませんでした。ですが・・・」

眼をキラキラ輝かせて嬉しそうに話していた薰の様子が、突然変わつた。

「ただ一人、ユリウス様と同等の力を持つていた墮天使が突如人間界を脅かし始めました。彼の名はアイヴズ。地界の墮天使達を率いて人間界でたくさんの人間を奴隸にしたんです」

「・・・奴隸？」

学校の授業くらいでしか聞かない言葉に、優雄は眉を顰めた。  
「墮天使は人間に契約を持ちかけるんです。その人間の望みを一つ叶える代わりに、見返りとして奴隸にさせる契約を。そうなると生き死にも墮天使次第です。寿命は墮天使と同じになりますが、死ねと命じられれば死にます。そして契約した人間が死ぬと、その魂は生まれ変わる事が出来なくなり、永久に彷徨うようになります。憎しみを募らせた魂はやがて地界に墮ち、理性をもなくして魔獸になってしまいます」

「魔獸・・・」

聞いた事もない名前だ。思わず呟くと、薫は悲しそうな表情になつて頷く。

「魔獸は人間界に這い出て、人間を襲います。誰かに倒されるまで、ずつと・・・」  
「・・・じゃあ倒されれば魔獸になつてしまつた魂は救われるんだな？」

いつの間にか真剣に話を聞いている事に気付かず、身を乗り出す。

「ある意味では、そうですね・・・」

「？ どういう意味だ？」

「・・・倒された時点で魂は消滅してしまうんです。まるで存在していなかつたかのように。理性を失っているとはいって、元は人間だったわけですから、人間を手にかける事はとても苦しい事・・・。それから解放されるなら、本人の救いにもなるかと・・・」  
「・・・」

優雄は質問してしまつた事を後悔していた。そもそも薫の話は突拍子もないものだ。信じそうになつていて自分に、無理矢理突つ込みを入れる。

（何で俺はこんな話を信じそくなつてんだ？ 有り得ないだろ）  
頭を振つて後悔した事を振り切つうと躍起になつていると、薰はそれを悲しんでいると受け取つたのか、話を続けた。

「人間界が悲しみに沈む中、それを救つたのがユリウス様です。墮天使から人間を救い出し、アイヴズを封印して人間界に平和をもたらしたのです」

薰の言動からユリウスが英雄視されている事は分かつていて。だが聞けば聞くほどそんなすごい人物の生まれ変わりだとは思えない優雄は、放つておかれていった皿を片付ける事で話を終わりにしようとした。

「優雄様？」

「悪いんだけど、俺疲れてるからさ。今日のところは帰つてもらえるか？」

そう言つと、薰は申し訳なさそうに頭を下げてきた。それにつられて柔らかな髪が肩から零れ落ちる。

「すいません、そんなにお疲れだとは思わず・・・ではここには私が片付けておきますので、優雄様はお休みになつてください」

「いや、いいよ。君も早く休んだ方がいいだろう」

眼も合わせず台所に向かう優雄に、薰は何かを感じたのかそれ以上何も言わずにいてくれた。

変な態度をとつてしまつた。

静かに帰つていく薰の背中を見送りながら、優雄は溜息を吐く。  
薰は何も悪くない。ほとんど自分のハつ当たりだ。  
自分こそ申し訳ないという思いに、肩を震わせる。  
(明日、謝つた方が良いかな・・・)  
皿を洗いながら、再び大きな溜息を吐く優雄だった。

### 3 初めて墮天使に会いました。・・・黒ずくめだな。

次の日、いつも通り憂鬱な足取りで学校に向かうと、校門を過ぎたあたりで男子生徒が数人たむろしているのが見えた。嫌な予感がして足早に通り過ぎようとしたが、やはりと言おうか、彼らの視線は優雄に集中した。

「おい、近藤！」

「お前いい気になつてんじゃねえぞ！」

「少しさは身の程つてもんを教えて

」

「優雄様！」

男子生徒の苛立つた声を押し退けて割り込んできたのは薫だ。彼らは思わず、といった感で口を閉ざす。

「優雄様！ 早く行きましょう！」

そう言つてグイグイ腕を引っ張つていく薫。男子達が声をかける暇もなく、彼女はズンズンとその前を通り過ぎてしまつた。

「あ、あの・・・」

「お弁当作つてきましたので、今日も一緒に食べましょうー。」

「あ、うん」

勢いに押されて頷くと、彼女の顔に嬉しそうな笑みが浮かぶ。どうやつて謝ろうかどうぞっと悩んでいたが、それだけでホッとしている自分がいた。

「・・・？」

その時、ふと誰かの視線を感じたような気がした。それはいまだ唖然としている男子達のものではない。

キヨロキヨロと辺りを見回していると、

「どうしました？」

薫に声をかけられ、ハッと我に返つた優雄は首を振つた。今は何も感じない。

「何でもない」

わつと氣のせいだわつ。そう思つて薰の後をついていった。

「見つけたぞ・・・・

そう呴いたのは全身黒ずくめの男。髪も眼も黒く、その背には黒い翼が生えていた。

「待つていろ・・・・ゴリウス」

はるか上空に浮かんでいた男は、口の端を吊り上げるとスウッシュと溶け込むように姿を消した。

「あの・・・・ありがとう」

体育が始まる前の休み時間。

みんなに押しつけられた体育委員の仕事で、準備のために体育館倉庫にやつてきていた優雄は、手伝うと言つてついてくれた薰に頭を下げた。

「いえ、これくらい何でもないですから

そう言つてボールが入った籠を持ち上げている薰に、優雄は首を横に振る。

「それだけじゃなくて、朝の事も・・・・

「ああ・・・・

薰は二ツコリ笑つて優雄の前までやつてくる。授業で使う用具ばかりが置かれた寂しい倉庫が、彼女の笑みで華やいだ気がした。

「気にしなくていいですよ。あんな陳腐な脅し文句、子供だつて怖がりません」

「・・・・情けないよな。こんな暗くて氣弱で、女の子に守つてもうわなきやいけない男なんて・・・・

笑いかけてくる彼女をまともに見られなくて、俯き氣味に一人ごちる。

こんな情けない男、放つておいてくれればいい。

そう思つたが、薰はふんわり笑つて優雄の頬に手を当ってきた。

「優雄様は優しいんですね」

「え・・・？」

「優しいから皆さんに何もしないんです。私は、優雄様のそういうところが好きですよ」

「・・・・・」

違う。俺は弱い。

心の中で、反論してしまう。

彼女が慕つてくれれば慕つてくれるほど、心の中に重しが積み重なつていいく。自分はユリウスなんかじゃない。そう叫ぼうとして

「ユリウス」

突如聞こえた低い声に、一人はハツと出入口を見た。そこには全身黒ずくめの男が立っていた。背中には黒い翼が生えている。

「墮天使・・・！」

薰の言葉に、優雄は男をジッと凝視した。

（これが墮天使・・・）

髪が黒ければ眼も黒い。それは日本人と同じなのだが、黒というより、闇と言つた方が相応しいかも知れない。

薰が本当の姿を見せた時は氣絶するほど驚いたものだが、話を聞いていたせいか彼の人間とは違つ姿を見て、どこか納得してしまつた。それは彼が発する威圧感のせいかもしれない。

「あなたがここにいるという事は、あの噂は本当だったのね・・・！」

「あの噂・・・？」

優雄が首を傾げると、庇うように立っている薰が小さく頷いた。

「アイヴズの封印が解けたという噂です。本当かどうかは分からなかつたのですが

「その通りだ」

薰の声を遮つて、男が一步近付いた。それだけで圧倒されるような力が増したような気がした。

「人間どもはそれを恐れてお前をこの世界へ向かわせたのだろう。ユリウスを連れ戻すために」

「・・・！」

それを聞いた優雄は、自分がショックを受けている事に愕然とした。

薰は人違いをしているのだと自分に言い聞かせていた。彼女の話は自分には関係がない、と。だが彼女が自分と一緒にいるだけで幸せだと言ってくれた時、心の中ではとても嬉しかったのだ。それが根底から覆されて、いじめを受けた時以上に傷付いている自分がいた。

「本当なのか・・・？ 君が俺の前に現れたのは、誰かに言われたからなのか？」

「・・・・・・」

薰は何も言わない。それが肯定なのだと感じて、優雄はグッと拳を握り締めた。

「もめているところを悪いが、ユリウスは連れて行くぞ」

「え・・・？」

「連れて行く・・・？」

てつきり殺される、と思つていた二人が呆気にとられている隙に、男は素早く近付いてきた。

「させない・・・！」

薰は何事かを呟くと、右手を男に突き出した。その掌から、眩い光が何条もの矢となつて射出し、男に突き刺さる。

「フン・・・」

しかし男はさして応えた様子もなく、鼻で笑うと虫を払うかの如

く腕を一振りした。

「きやつ・・・！」

まるで巨人の手に払われたかのように薫の身体が吹っ飛び、バスケットボールが入った籠にぶつかった。音を立ててくずおれしていく彼女に、優雄はそちらへ駆けようとした。が、その眼前に立ちはだかつた男の威圧感に足が止まってしまう。

「う・・・」

怯えて後退る優雄に、男はいらついたように眉間に皺を寄せた。「これがユリウスの生まれ変わりか。また弱くなつたものだ」

「・・・」

どうしてこの男まで自分をユリウスの生まれ変わりだと勘違いしているのだろう。

男の手がこちらに向かつてくるのを見ながら、優雄はグッと身を固くした。その時 体育館の方から大勢の声が聞こえてきた。クラスメイト達がやつてきたのだ。

「チツ、面倒な事になりそうだな」

そう言つて、男は後ろに下がると闇に溶けるかのように姿を消してしまつた。

「・・・・・」

へなへなと力なく座りこんだ優雄は、散乱しているボールに気付いて慌てて薫を見た。

「だ、大丈夫か・・・！」

腰に力が入らなくて這つていいく格好になつてしまつたが、何とか彼女のもとに辿り着くと頭をそつと持ち上げた。

「大丈夫です・・・」

意識ははつきりしているようだ。

強打した身体が痛いだろうに、こんな時まで笑みを向けてくれる

彼女に、優雄は心底情けない気持ちになつた。

自分は何もできず、彼女に守られてばかりだ。弱い自分が恥ずかしい。

思わず俯くと、薫は優しく頬を撫でてくれた。

「優雄様。確かに私がこの世界に来るきっかけになったのは人間達に懇願されたからですが、私があなたをお慕いしている気持ちに偽りはありません。あなたが望まなければこのままこの世界で生きていただいても構わないのです」

「でも・・・！」

「私はあなたのお傍にあります。それが私の幸せなのですから」

そう言って本当に嬉しそうに笑う彼女が愛しく感じられて・・・

優雄は彼女の身体をギュッと抱き締めたのだった。

#### 4 墮天使と対峙しました。・・・無理くね？

「本当に大丈夫なのか？」

学校からの帰り道。

薫が元気になるまで待つてていたために辺りは真っ暗になっていた。

生徒もみんな帰つてしまつたらしく、静かな道を一人で歩く。

何でもないかのように振る舞う彼女に、優雄は何度目か分からぬい質問をしてしまう。対する薫の返答も同じ。

「もう大丈夫です。魔法で回復しましたから」

「魔法・・・」

よく小説や漫画なんかで聞く言葉だが、実際に見たのは今日が初めてなのだ（昨日も見たがよく覚えていない）。本当に回復しているのか、自分には分からぬ。

「私、攻撃系よりも補助系や回復系の魔法の方が得意ですから」あまりにも心配そうな顔をしていたのか、薫にクスクスと笑われてしまつた。

「そ、それより、倉庫で会つた男だけど・・・」

咳払いしつつ話題転換を図ると、彼女の顔が曇る。

「ミシユレですね」

「ミシユレ？」

「あの墮天使の名前です。アイヴズの右腕とも呼ばれています」

「アイヴズの・・・」

そこまでの力を持つ墮天使がユリウスを狙つてやってきた。だが・

・

「何故俺を殺そとしなかつたんだろう？」

それが二人の共通の疑問。

ミシユレは優雄を殺そとはせず、連れて行こうとした。ユリウ

スが復活する事を恐れて邪魔するつもりなら、殺した方が手っ取り早いはず。・・・自分でこんな事を思いたくはないが。

「私も不思議に思つておりました。アイヴズが真っ先に狙うのはコリウス様の生まれ変わりであるあなただと予想はしておりましたが・・・。とはいえ、危険な事に変わりありません。優雄様は私がお守りします」

「・・・やつぱり、あいつまた来るのか・・・？」

この時優雄の頭にあつたのは薫がぐつたりと倒れていた時の光景。また彼女が怪我をするような事があれば自分は・・・。

「あれ？ ネクラじやん」

聞こえてきたのは男の声でなく女の声。思わず身構えてしまつた二人だが、少しホツとして肩の力を抜く。だが相手が誰か分かつた優雄は再び身を強張らせた。

「こんな遅くに学校の帰り？ 一人で何してたんだか？」

相手はクラスメイトの木内響香きうちひびきかだった。優雄を苛めていた中の筆頭である彼女は、クラスのリーダー的存在だ。というより、支配者と言つた方が近いかもしれない。

彼女の家は結構な金持ちで、学校にかなりの金額を寄付していると聞く。必然的に彼女に逆らえる者はいなくなり、生徒や教師から一目置かれていた。ただ高飛車な物言ひが目立つ彼女に、敬う人間がいるかどうかは不明だが。

「あんたもモノ好きだね。こんな暗くて陰気臭い奴が良いなんて。あたしだつたら近寄りたくもない」

矛先は優雄だけでなく薫の方にも向いた。

いつもオシャレに気を使つていてる自分より綺麗な薫に、嫉妬しているようだ。薫の場合は意識しているわけではなく、基が良いだけなのだが。

嘲笑を顔に浮かべながら木内は続ける。

「一人で駆け落ちでもすれば？ そしたらキモイ顔見なくて済むからさー」

キャハハ、と下品な笑い声を上げて、楽しそうに学校の方へ向かつて歩いていった。

「・・・ごめんな」

思わず謝ると、薫はキッと強い視線を向けてくる。

「優雄様は何も悪くないのですから、謝る必要はありません」

「でも、俺のせいでも君まで悪口を・・・」

「気にしていません」

そこでニーッ！」と笑ってくれる彼女に、優雄はついありがとうと礼を言つてしまいそうになつた。だが彼女はそれすらも拒むだろ。礼を言われる理由もないと。

気恥ずかしくてそっぽを向いていると、視界の端に何かが映つた。そちらを見ても今は何もない。

暗いから何かを見間違えたのだらう。

そう思つたが、何か気にかかる。

変な顔をしていたのか、薫が「どうしました？」と訊いてきた。

「何でもないよ。ただ黒い何かが見えたような気がしただけで・・・

「黒い何か？」

「黒猫かも」

そこまで言つて、ハツとする。

黒、と聞いて連想されるのは・・・

薫も同じ考えに至つたようで、顔を強張らせる。

「まさか・・・ミシユレ？」

「ですが、私達を襲わないなんて・・・」

「・・・俺達以外の人間を襲う事なんて・・・ないよな？」

「ないとは言い切れませんが・・・」

「

黒い何かを見たのは今来た道、つまり学校へ向かう方角だ。そこまで考えて、まさか・・・と息を呑む。

「木内さん、学校の方へ向つてたよな・・・」

「・・・！ 急いで追います！ 優雄様は家へお帰りください！」  
そう言つて薰は来た道を駆け戻つていつた。優雄が声をかける暇もない。

「お帰りくださいって・・・」

女の子が危険かもしない場所へ行くのに、男が逃げるのか・・・？

しかし昼間に味わつた恐怖が優雄の足を震えさせる。  
自分はこんなに弱いのに、行つて何が出来る？ むしろ足手まといじゃないか。

そう思つて反対方向へ足を向けたが、一步が踏み出せない。

「・・・っ」

その時頭をよぎつたのは「気にしていません」と言つた薰の笑顔。  
こんな自分の味方でいてくれた、家族以外の唯一<sup>ただひとり</sup>大切な人。

そんな人を見捨てるのか。

「・・・出来るかよつ、そんな事！」

震える足を叩いて自分を叱咤し、優雄は急いで薰の後を追つた。

もう遅いため閉まつていた校門を、よじ登つて中に入る。そこで女の悲鳴が聞こえてきたので、慌ててそちらに向かつた。

視界に飛び込んできたのは腰を抜かしたようにしゃがみ込んでい

る木内と、彼女を庇つよつに眼前に立つ薰、そして少し離れたところで宙に浮いているミシユレだ。

優雄に気付いた薰が一瞬驚いたよつて眼を見開くが、すぐに嬉しそうに笑つた。

「来てくださつたのですね」

嬉しそうにしてくれたのが氣恥ずかしくて、優雄は「ああ」とぶつきらぼうに答える。

「木内さんをよろしくお願ひします。あいつは私が押さえておきますので」

「分かつた」

ミシユレの方を気にしながら木内のもとへ行くと、彼女の腕を引いて立たせようとした。が、腰どころか足にも力が入らないらしく、立てない。墮天使を見たショックだとは思うが、全身震えながら恐怖に見開いた眼でミシユレを見る姿は尋常ではない。

「ミシユレに何かされたのか？」

今までずつと苛められてきて、恨む気持ちがないわけではない。だがこんな場面で恨み言を言つつもりはないし、彼女の様子を見てその気持ちすら吹つ飛んだ。

「ぞつと見たところ怪我はしていないよつだが……。

「氣に中あてられたのでしょうか。慣れない者が墮天使を前にすると氣圧されますから」

ミシユレを油断なく睨みながら薰が言つ。

確かに体育館倉庫でその姿を見た時は優雄も圧倒された。その時の事を思い出して身体をブルリと震わせると、笑う気配がした。

「そいつはコリウスを苦しめていたのだよつて、何故ゆゑよつとするのか、理解に苦しむ」

見ると男の顔には苦笑めいたものが浮かんでいた。馬鹿にするかと思つたが、意外だ。

「それが人間といつもの。あなた達墮天使には分からぬでしょ  
うね」

薰はまた何かを呴き、掌に光を集める。それが魔法だという事はもう理解しているが、慣れないと違和感がつきたう。

（何なんだ・・・これ・・・）

だが今は考え方をしている場合ではない。

優雄は木内の腕を持ち上げると、自分の肩に回して身体を支えた。いつもなら肩がちょっと触れただけでも「キモイ」と黴菌扱いだが、今は抗うどころか素直に歩き出す彼女に苦笑してしまつ。

「ハツ！」

薰が手に集めた光をミシュレに向けて放つ。体育館倉庫で見たものよりも威力が強く、眼を開けていられないほどに眩しかつた。だがそれほどの力をもつてしても相手には全くと言つていいほど効かず、手の一振りで光を弾き返されてしまった。

「きや・・・つ」

返つてきた光が地面を抉り、その衝撃で薰は軽く飛ばされてしまう。

「やはり私程度の攻撃魔法では・・・優雄様！」

彼女の悲鳴に振り返つた優雄が見たものは、薰には目もくれずこつちに向かつてくるミシュレだった。

「その女、私の姿を見たからには消しておくか。奴隸にする価値もない。ユリウス、お前は生かして連れて行かなければならぬからな。早くこつちに来い」

そう言つて腕を伸ばしてくる。言葉を向けられたのは優雄だったが、反応したのは木内だった。

「何であたしが殺されなきやいけないの！？ 全部あんたのせいなんだよ！？」

どうやらミシュレに対する恐怖より怒りが上回つたらしい。いつも高飛車な言い方に戻つて怒鳴り散らす。

「だったらあんたが何とかしなさいよ！ あたしは関係ないんだか

۱۵۱

これまで支えていた身体が全てを拒絶するかのように暴れ出す。

偶然、彼女の腕が優雄のこめかみに当たった。そのせいで眼鏡が吹き飛び、視界がぼやける。

「チツ、騒々しい女だ」

卷之二

ミシユレから発せられる威圧感が増し、逃げようとしていた木内は怯えて動けなくなつた。怒りで紅潮していた顔色が、サーッと青くなつっていく。

このままでは彼女は殺されてしまつ。

そう思つた優雄は震える身体に鞭打ち、一步踏み出して彼女を庇つよう背にした。

「…理解に苦しむ」

「ミシユレがボソリと呟いた言葉ほどか寂しそうだった。優雄はそれを不思議に思いながらも、ぼやける視界の中、必死にミシユレを睨んでいた。

（俺だって自分がこんな事をしてるなんて信じられないよ・・・）  
普段の気弱さはどこへいった、と自問したい。

ミシユレはいい加減嫌になつたのか、自分の羽を一本取ると鋭く投げ付けた。黒い弾丸となつた羽は優雄の顔の横を通り過ぎ、後ろ

「 もう あたま さう 」

慌てて振り向くと、頬を押さえて泣き叫ぶ彼女の姿が。

「あたしの顔が・・・！！」

押さえる手の間から血がぼたぼたと流れている。どうやらかなり深い傷らしい。あれでは治つたとしても痕が残るかもしない。

「なんて事を・・・・！」

思わず優雄が叫ぶと、ミシコロはフツと鼻で笑つて再び羽を構え

た。

- 夕メ !

優雄が反応するより早く飛んだ羽が木内に届く直前、彼女の身体が突き飛ばされた。突き飛ばしたのは薰だ。代わりに薰の腕に羽が突き刺さる。

卷之三

薰！」

傷を押さえでぐすおれた彼女の身体を支え、顔を覗き込むと辛そうに唇を噛んでいた。無理に羽を抜く事も出来ず、優雄はミシユレを睨む。

一貴様

「悔しいか？ 女一人守れない自分が腹立たしいか？」  
「うるさい。昔のユリウスのよう」

腕の中の温もりを守るように抱き締めながら、優雄はグッと唇を

噛み締めた。

みんなしてユリウス、ユリウスと煩い。俺は俺だ。俺は彼女を・・・  
・ 薫を守りたい。強く・・・強くなりたい！

「もう手加減はなしだ。その一人は殺す」

そう言つてミシユ<sup>ミシユ</sup>レは手に光を集め始めた。薰の<sup>クスニ</sup>ような呪文はな

い  
。

・・・そうだ。呪文がない。

先程感じた違和感はこれだ。

( · · · 違和感 ? )

何故そんなものを感じるのか？  
自分は魔法の事は知らないはず・

その時、ふと脳裏に何かが過つた。これは・・・旋律・・・?

## 5 僕が魔法を使ったそうです。・・・覚えてないけど。

少しの間、ぼんやりしていたようで、腕を引かれる感触にそりひりて視線を向ける。

「お逃げください・・・っ、私の事は構わぬ・・・」

傷が痛むだろうに、必死に優雄を守ろうとしている。

優雄は口元に微笑を浮かべると、大丈夫とういうように彼女の柔らかな髪を撫でた。驚いたように眼を見開く薫を優しく横たえて、ミシュレと向き合つ。

「私と来る気になつたか？」

掌に圧縮された光が辺りを照らし、熱を発している。さながら太陽を眼の前にするが如く。だが優雄は表情一つ動かさず、口を開いた。

「関係がない人間まで巻き込むな。お前に連れて行かれずとも、こちらから出向く！」

「ほつ・・・」

ミシュレは眼を細めて優雄をジッと見た。

「・・・だが、そいつを生かしておくつもりはない。妖精はもう役に立たんぞ！」

手の光が放たれた。背後の木内へと。

「ひつ・・・」

木内は頬の痛みを忘れて蹲るように頭を抱えた。光が彼女の身体を焼き尽くそうとしたその時・・・

「バシン！」

何かが弾かれるような音がして、木内は恐る恐る顔を上げた。

「・・・え・・・？」

木内の周りに透明な膜のようなものが張られていた。それが墮天

使から放たれた光を弾いたらしい。

「け、結界・・・!？」

驚きの声を上げたのはミシュレだ。

「妖精がやつたのではない・・・まさか・・・」

優雄はミシュレの視線を受けて微笑んだ。そして彼に背を向けると、呆然と自分を見ている木内の眼前で膝をつく。

「大丈夫。その傷、痕も残さずに治せるから安心するといい」

そう言って右手を彼女の頬にかざす。手から淡い光の粒が放たれ、木内の頬が見る見るうちに治つていく。

その間、木内は優雄の顔を正面からジッと見ていた。

眼鏡を外した素顔を見るのは初めてだつた。いつも俯いていたためにどんな顔をしているのかさえ知らうとしなかつた。それを今、後悔している。なにせ彼の素顔は今まで見た事がないと言つても過言ではないほど綺麗な顔をしていたのだ。

木内にだつて憧れの人はいた。その一番力ツコいいと思つていた彼よりも上回る美貌に間近で見つめられて、心臓が破裂しそうなほどドキドキと高鳴つている。

(ウソ・・・何で「オイツ、こんなに美形なワケ・・・?')

しかもその美青年が自分に微笑みかけているわけで。

今の状況も忘れて、彼女はポカンと優雄の顔を見つめ続けた。

「これでいい」

優雄が手を退けると、木内の頬は傷痕もなく綺麗になつていた。

次は薰だ。

同じように透明の結界が張られた中で横たわる薰の腕に、右手をかざす。

「優雄様・・・」

「じつとしているんだ」

起き上がるうとする彼女の身体を優しく押さえ、腕の傷も治療し

た。

二人の治療が終わると、優雄は再びミシュレに向き直る。  
ミシュレは優雄が一人の傷を癒すのを見ているだけで、邪魔しようとはしなかった。

「・・・コリウス」

ミシュレがボソリと呟く。

優雄はゆっくりと彼に近付くと、その腕をとつて魔法を発動した。  
即ち、空間転移の魔法を。

「アイヴズに伝える。じつから会いに行くと」

「・・・待つている」

ミシュレを中心に、風と光が舞うように渦を巻く。まるで昼間の  
如く明るく照らすその中で、渦の回転が速くなり、次の瞬間には墮  
天使の姿は消えていた。

「優雄様！」

背後から薰の声が聞こえる。

振り返ろうとした優雄は、突然視界が真っ暗になり、意識を失つ  
て倒れたのだった・・・

「う・・・」

「気がつかれましたか？」

頭上から薰の声。眼を開けると、彼女の顔がすぐ目の前に・・・

「うわっ！？」

優雄はがばっと飛び起きた。どうやら倒れた自分を介抱するため  
に膝枕をしてくれていたらしい。

「あれ？ 僕、どうなったんだっけ？」

何故倒れていたのか。少し前までの記憶がすっぽり抜けている。

「覚えてらっしゃらないのですか？」

「うん・・・薰が魔法を使った事までは覚えてるんだけど・・・

「あ・・・」

「ん？」

突然薫が頬を赤くするので、優雄は何か変な事を言つたか、と焦る。が、それは違つた。

「また、私の名前を呼んでくださいましたね」

「名前？」

「はい。なかなか呼んでくださらなかつたので、私の事お嫌いなんかと思っておりました。ですが先程も私の名を呼んでくださいました。心配してくださいましたのですよね？」

「そ、そうだつたかな？」

なにせ先程までの記憶がないのだ。薫の事を嫌つてゐるわけがないが、ほとんど無意識に彼女の名を呼んでいた事が恥ずかしい。「覚えていないという事は、ご自分が魔法を使いになつた事も覚えていないという事ですか？」

「俺が・・・魔法を・・・？」

「はい、と頷く薫。だがどうも記憶がないせいか実感がない。

「そついえば、薫の魔法を見て、何か違和感を感じたんだ」

その後だ。自分が自分でなくなつたのは。

「違和感・・・ですか。それは当然だと思います。魔法は魔法でも私達妖精が使うものと天使や堕天使が使うものは別ですからね」

「別？」

「はい。私達は呪文を唱える事によつて発動します。天使達は歌によつて発動するそうですが、実際に歌わなくても発動できるそうですから、それだけでも違いますね」

「そうか・・・」

違和感の意味は分かつたが、それを感じたという事はヨリウスの生まれ変わりだという話を信じてもいいかもしない。

「ちょっと！」

そこで甲高い声が割り込んできた。

「あれ、木内さん？」

「あれ？ じゃないわよ！ 一人だけの世界作つて！ あたしの事すっかり忘れてるでしょ！」

はい、その通りです。

なんて口には出せないので、優雄も薰も口を噤む。  
「ワケ分かんない話してないで、ちゃんとあたしにも説明しなさいよー！」

学校中に響き渡りそうなほどの大聲で怒鳴りながら優雄と薰の間に身体ごと割り込んでくる。それまでの優雄に対する態度からしたら、驚愕に値する行為だ。

「・・・・・」

説明をしろと言われても。

薰は関係のない者にまで話すつもりはないし、優雄はやつと先程信じ始めたところなのだ。だが彼女は自分のせいで巻き込まれてしまつたのだから、説明するべきだろうか。そう思い、薰の方を見ると口元を動かしていた。相変わらず理解できない言葉だが、呪文だという事は何となく分かった。

「「めんなさー」

そう一言謝ると、薰は指を木内の額に当てた。途端に彼女の身体が崩れ落ちる。

「うわっと・・・」

頭を打たないようすに支えて、ゆっくり横たえる。鼻からは規則正しい呼吸音が聞こえた。眠っているようだ。

「しばらくすれば眼が覚めます。その頃には先程までの記憶は忘れているはずです」

「そりか・・・

魔法つて便利。薰、すごい。

思わず心の中で称賛する優雄である。

「では今のうちに帰りましょ」

「帰るつて・・・俺の家にか？」

彼女が向かおうとしたのは優雄の自宅に向かう道。

てつくり元の世界に戻ると思っていたのに。

・・・何故そう思ったのか、自分でもよく分からなかつたが。  
「勿論ですよ？ 他に寄る所があるなら仰つてくださいね」

ニツ「リ笑う彼女が、本当に優雄を大事にしてくれているのがよく伝わってきた。本当は一刻も早く元の世界に連れ帰りたいだろうに。だから優雄は決心した。その決意を口にする。

「・・・薰。元の世界に戻るつ

「・・・！」

薰は言葉を失つたかのように口を手で押さえる。

彼女が驚くのも無理はない。普段の優雄ならば、元の世界に戻りたいなどと言うわけがないのだ。それを知つていて、彼女も無理に連れて行こうとはしなかつたのだ。

「ここにいたつてミシュレみたいに他の墮天使が来るかもしない。そしたらまた無関係の人ぐるき込まれるかもしない。そんなの俺は嫌だ。良い思い出はあまりなかつたけど、死んでほしい人間なんて誰一人いないんだ。・・・俺がこんな事言うの、可笑しいか・・・？」

あまりにも喜色を湛えた眼で見てくるものだから（といふか涙まで浮かべている・・・）つい気恥ずかしくてそっぽを向いてしまう。しかも彼女が何も言わずに優雄の胸に抱き付いてきたので、顔が真

つ赤になつてゐる事請け合いである。

「は、早く行こう！ 早く！」

平静を保とうとしても声が上擦つていては意味がない。今の優雄は相当可笑しな人になつてゐるだろうが、薫は笑わないでいてくれた。本当に優しい、良い子だ……

「私の手を握つてください」

「はい、いつ？」

ほろりと感動してゐる時にこのセリフ。つい声が裏返つてしまつた。

（恥ずかしがつてゐる相手に何を……つ）

「空間転移魔法であちらの世界に向かいます。手を離さないようお願いします」

あ、そういう事か……。一人で勘違いして突つ走つて、何やつてるんだか……。

思わず溜息を吐く優雄である。

「？」 どうしました？ 「

「な、何でもない、何でも……」

可愛く首を傾げる彼女の手を慌てて握る。男とは違つて柔らかい感触がなんとも気持ち良くて、動悸が激しくなりながらも安堵した。（別の世界に行くつて、少し怖いしな……）

気弱な部分が治つたわけではないので、戸惑いはある。手の震えに気付いていても薫が何も言わずに力強く握ってくれるから、「やっぱりやめよう」なんて言わずに済んでゐるのだ。

「行きますよ？」

なんだかファイナルアンサー？ と訊かれたような気分だ。

優雄は躊躇いを振り払つようになくくりと大きく頷いた。

## 6 異世界で会ったのは『大阪のおばあちゃん』でした。・・・あれ？

「着きましたよ」

薰の言葉に、優雄はゆっくりと眼を開けた。

空間転移とやらは慣れないうちは気分が悪くなりそうなほどの不思議体験だった。身体と心がズれるような感覚、とでも言えばいいのだろうか。足元がグラついているような感覚が残っていて、眼を開けた途端に眩暈に襲われる。

「だ、大丈夫ですか？」

ふらついた身体を支えてくれた薰に礼を言い、改めて周りを見回す。

「・・・森？」

辺りは木と草と花ばかり。一面緑だらけで、ここまで生い茂っている場所を、今まで見た事がない。柔らかく差し込む陽光が木々の間から零れている。そのおかげか、空気が綺麗でとても心地いい場所だった。

何だろう。何か懐かしいといつか、安心する。

先程までいた日本ではこんな場所など見た事がない。探せば自然が残る場所はあるだろうが、少なくともこの森と同じものは存在しないだろう。

それほどに清浄な空気に満たされた場所だった。

・・・というか、夜じやないのか。

向こうの世界では夜だったが、こっちの世界ではまだ朝らしい。別に眠くはないので問題はないが。

「ここは清浄の森と呼ばっています。魔獣は入り込む事が出来ない

ので、昔の人間はこの近くに街を作ったのです。今ではたくさんの人間が暮らしています」

「ここから少し歩いた所にある街に向かうのだと言つので、優雄は彼女の後をついていった。

「清浄の森、か。名前の通りの場所なんだな」

優雄が今まで見た事がない花が咲いていた。とても可愛い小さな花だ。見ていると心が癒されそうだ。中にはバラに似た花も見つけたが、棘がないし香りも優しくて花の妖精だという薰のような花だと思った。・・・恥ずかしくて彼女には言えないが。

「そいつえは優雄様、木内さんの事があつて忘れておりましたが、見えているのですか？」

「え？」

「視力が悪くて眼鏡をかけていらつしゃったのでしょうか？」

「あれ？」

思わず自分の眼元をペタペタと触つてみた。やはり眼鏡がない。確かに眼鏡は木内さんが暴れた時にどこかに飛んでったような・・・そこまで考えて、ハツと気付く。

「何で見えてんだ！？」

そうなのだ。眼鏡がなければぼやけて目の前の物の判別さえ難しいほどだつたはずの視力が、どういうわけか回復していた。

「魔法か？ 薰、俺に何かしたか？」

勢い込んで訊ねると、ビックリしたように眼を瞬いた薰が首を横に振る。

「私は何も・・・むしろ」自分でなさつたのでは？」

「自分で？ そんな事出来るわけないだろ。俺は魔法も使えないのに・・・」

「ですが、ミシュレを魔法で追い返したのは優雄様ですよ？」

・・・そつだつた。自分には記憶がないので何とも言えないが、

薰と木内の傷を治して墮天使を追い払った事は彼女から聞いていた。それなら自分で視力を何とかしたのかもしない。

「・・・魔法すごいって感心すべき?」

「『自分の力ですのに・・・』

あくまで自信なさげに咳く優雄に、薰は苦笑混じりに溜息を吐く。

「ああ、もう少しで見えてきますよ」

そう言つてほつそりした指で差した先に、木々の切れ間から光を反射して輝く壁面が見えた。つい眩しくて一瞬目を閉じるが、瞼を持ち上げると開けた視界いっぱいに真っ白な建造物が立ち並んでいた。中央に見えるのは一番大きくて立派なお城。その周りを城下町というやつか、たくさんの市街が取り囲んでいる。

「綺麗だな・・・」

ポツリと呟くと、薰が同意するように深く頷く。

「この街は百年前から変わっていません。天使を象徴する白を基調に、昔の人間はこの街を平和のシンボルとして作つたそうですよ」

「そうか・・・」

白く輝く建造物に見惚れながら、優雄は思った。平和を願いながらも墮天使の強襲に曝された人間の悲しみを。そして・・・人間の拒絶を形にした街を見る、墮天使の切なさを。

「・・・え?」

優雄は自分で自分に問い返した。

(俺、何で墮天使の肩を持つような事考えてんだ・・・?)

一人首を傾げていると、並んで街を見ていた薰が「解除」と呟いて本来の姿に戻った。掌に収まるほど小さい彼女が、優雄のためにずっと頑張つてくれていたのだと思うと、愛しさも一入である。感激のあまり泣きそうになつっていた優雄は、先程疑問に思つた事はすっかり忘れてしまつた。

「ようこそ、平和を象徴する白亜の街、カエラスへ」

綺麗な虹色の羽を動かしながら飛ぶローズ（薫の事だ）の案内で、優雄は城に向かっていた。城までは城下町を通り、人々的好奇の眼がピッタリとついてくる。悪気がないのは分かっているが、どうも落ち着かない。

「ローズさま！」

突然聞こえてきたのは高く幼い声。四、五歳ぐらいの可愛い女の子だった。

転びそうにならがらも一生懸命走つてローズのもとまでやつてくる。

「ローズさま！ ウェンね、泣かなかつたよ！ 待つてて間、泣かなかつたよ！」

「偉かつたね、ウェン」

女の子のリングゴのように赤い頬を小さい手で撫でてやりながら、ローズが笑う。

「コリウスさまは？」

小さく首を傾げる姿はとても愛らしい。

キュンとなつた胸を押さえながら、優雄は自分はロリコンじゃない、ロリコンじゃない、と心の中で強く念じていた。

「こちらがコリウス様よ。今は優雄様と仰るの」

ローズに促されて女の子がおずおずと見上げてくる。ぱちりとした大きな瞳に、好奇心と緊張の色が見て取れた。

「優雄様。この子はウェンディと言つて、私のお友達です」紹介されたウェンディは行儀良べこりと頭を下げた。

「こんなに素直で行儀が良い子供が日本にいただらうか・・・少なくとも自分の周りにはいなかつた。

優雄は膝をついて子供の目線に合わせると、微笑を浮かべて「よろしく」と挨拶した。するともともと赤かった頬が益々朱に染まる。眼鏡がない素顔はあのいじめっ子の木内でさえ押し黙つたほど

美形なのだ。幼いとはいって、女の子が見惚れるのも無理はない（ローズ談）。

ポーツと見惚れている彼女の頭を撫でていると、向こうから「ウエンティー！」と名前を呼ぶ声がした。

「勝手に行っちゃ駄目って言つてるだろー。転んで怪我したりどうする・・・の・・・」

どうやらウエンティの母親のようだ。彼女はウエンティを注意しながら連れて行こうとしたが、優雄を見てピタリと動きを止めた。

「・・・あの？」

黙つたままの母親を不思議に思つて声をかけると、ハツと我に返つたように眼を瞬かせた彼女は、素早くボサボサの髪を整えた。

「やだよお、こんな美形にこんな姿見せりまつて・・・恥ずかしい

よ

顔を赤くしながら服まで整え始める。

見たところまだ二十代後半だと思つ。若いのだから自分を綺麗に見せたい気持ちは理解できるが。

「恥ずかしくないですよ。頑張つている姿じゃないですか。とても魅力的です」

そのままでいい、という気持ちで言つたのだが、彼女はさらに顔を真つ赤にして埃を払うようにバタバタと服を叩いてくる。さすが親子なだけあって、赤くなつている顔はそつくりだ。

「ハイネ。こちらはユリウス様の生まれ変わりである優雄様よ」

「ええっ！？ ユリウス様の！？」

苦笑混じりのローズの紹介に、ウエンティの母、ハイネは驚愕して、赤い顔から一転真っ青になつてしまつた。

「も、申し訳ありません！ まさかユリウス様の生まれ変わりの方だとは思はず・・・し、失礼いたしました！」

娘の頭をグイッと掴んで一緒に頭を下げる。だがそれ以上に慌てたのが優雄だ。

「やめてください！」

と大声を出してしまった。周りから視線が集まる中、逃げ出した  
い気持ちを抑え込んでゆっくりと口を開く。

「何も失礼な事なんてされてませんし、俺はあなた方と同じ人間な  
んです。頭を下げるほど偉いわけじゃない」

「ですが・・・」

「普通に接してください。俺はまだ十七歳の子供なんですから」  
やつと頭を上げてくれたハイネがジッと優雄を見上げてくる。そ  
の眼に尊敬の色が見えたので、駄目か・・・？ と優雄は不安にな  
る。が、それは無用の心配だつたようだ。

「そうかい？ ジャあ普段通りでやらせてもらひつよ。ビリも私にや  
敬語は無理っぽいからねえ」

実にあつけらかんと言われて、拍子抜けしたほどである。

さつきまでの緊張は一体・・・

傍らからクスクスと笑い声が聞こえて、そちらを見るとローズが  
肩を震わせて笑っていた。

「・・・ローズ、分かって黙つてただろ」

「す、すいません。ハイネは見た目は若いですが、中身はもうおば  
さんみたいな感じで・・・。何としましたか・・・ああ、『大阪  
のおばちゃん』に近いです」

「・・・これまた分かり易い表現をありがとう」

憮然とした優雄だが、おかげでみんなの肩の力が抜けたのか普通  
に声をかけてくれたのでまあよしとしよう。

力エラスの人達は基本的に明るく陽気な人柄らしい。まさにロー  
ズが称した『大阪のおばちゃん』だ。だが城に近付くにつれてその  
物々しい警護に緊張が高まっていく。

「お城つて事は・・・王様がいたり、とか？」

「はい。この国を治めるアリウス公がおられます」  
「…………」

そんな人に会えってか。庶民の俺に会えってか。……ぶつちや  
け勘弁してほしい。

そんな心の声を読んだのか（つていつか顔に出てる？）、ローズ  
は優雄の肩に止まって頬を撫でてくれた。

「大丈夫ですよ。アリウス公もカエラスの人間ですよ？」

つまり明るく陽気で『大阪のおばちゃん』風だと。

「……別の意味で辟易しそうだ……」

ボソリと呟くと、ローズは腹を抱えて笑ってくれたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7676y/>

---

約束～天使より堕天使～

2011年11月27日18時11分発行